

きておりましたが、風の便りにダモイの話が流れて来るようになりました。昭和二十三年十月となり、今年もまた寒い冬を越すのかと暗い気持ちでおりましたが、突然ダモイの連絡がありました。幹部の者二、三人が残され、残り全員が貨車に乗せられてナホトカ港に向かって出発しました。ナホトカにて民主教育があつて、これがよくないと元に戻されると聞きましたが、私たちは船の都合が順番のためか、十日間くらいはナホトカの生活にて、十月十六日に山澄丸に乗って待ちに待った日本の港舞鶴港に上陸することができました。

凍原の虜囚

鳥取県 森田 廉

私は昭和十六年三月に満州奉天造兵所（関東軍兵器製造所）に単身出発就職し、現地入営。終戦は横道河子で迎え、武装解除となり、海林の天幕收容所に入る。

八月も終るころに突然海林街と別れることになった。待機している貨物列車に乗車せよと命令が伝わった。貨車の中は二段づくりで狭苦しい。一貨車に六十人の軍人が詰め込まれた。東満国境の町綏芬河駅を通過したのはたしか九月二日ころであった。日本への帰国がソ連領での銃殺か、はたまた強制労働か、三つに一つと心が動いた。そのうちに列車はウオロシロフという異国の町に到着して、引込線に入れられて我々も下車し、大草原に着いた。ここで当分の間草刈りして帰国を待つというほのかな希望も捨てなかった。

大草原の中に自分たちの抑留される二重張りの有刺鉄線の囲いをつくり、四方の隅々には望楼と称した歩哨監視所をつくつてその中に入る羽目となった。九月の初めだというのにシベリアはずいぶんと冷える。夜は寒くて人と人が寄り合つて暖をとり寒さをしのいだ。八月九日以来（開戦）毎日歩き通しで入浴などとても考えられない日々であった。着のみのままで作業しそのまま寝る。だからシラミがわいてきて我々の血を腹いっぱい吸い取つて、それでなくとも飢餓の

状態で体が日に日に衰えていく栄養失調の哀れな人間に寄生するのである。暖い日にはシャツを脱いでシラミ退治である。特にシャツは縫い目には卵と米粒大の成虫がぎっしり。取っても取っても絶えることなく、繁殖力旺盛で皆が悩まされた。

十一月の声聞けば寒さが一段と厳しくなる。食糧不足に加えてシラミの襲撃、それに作業のノルマに追われて体力は日に日に衰えていくのが目にわかるほど。

明日をも知れぬ虜囚の身のこの生命を支えるためには、少しの暇でも体を休ませることに努め、隣の戦友と体を寄せ合つて猿のように暖を取り合っていた。極限の状態から無謀な行為と知りながら脱走を企て、捕まつて射殺されたり、いろいろな話が飛び交うた。望楼の監視兵は脱走兵の監視が重点だから、否応なしに発砲する。たとえ脱走したところで日本に帰れるはずがない。地図を見てもわかるはずであるが、気狂いがいるくらいな極限状態だから、精神状態が普通でない。

さて、ウオロシロフ街近郊の草刈場を出発、大型貨物自動車で他に向かった。途中追突の事故を起こし、

六十余人の乗員中無傷の者は私を含め数人に過ぎない。全く天祐神助というか奇跡である。かくして森林伐採地に着き半地下式宿舎に入ることとなった。冬の気配が強いシベリアの地は寒さが日に日にこたえる季節となつてきた。吹雪舞う日が何日も続き、暗いどんよりとしたシベリア独特の空が毎日続くようになつた。

伐採作業の内容は伐採班、道路班、積載班に分かれる。伐採班は朝五時に起床、アワの量より水の多いカーシャ（おかゆ）をすすり、二人一組となつてタポール（手斧）を各人持ち、それに二人で引く大きな鋸を一本渡される。収容所から四キロも離れた原生林に雪を踏みわけて入つて行くのである。防寒外套の上から鋸を帯のようにぐるりと腰に巻き付けて、引手をガチャと組み合せて歩く。荒縄で縛つた帯にタポール（斧）を腰にぶら下げたの行進である。元関東軍の精鋭を誇つた人間とはどうしても見えない。あまりにもみすぼらしい姿である。作業中に逃げおくれ倒れる枝にたかかれて多くの戦友が死亡し、また負傷者を出したこ

とは残念なことであつた。一日の作業量はノルマ（基準量）で示される。二人分で五クボ（五立方メートル）であつたが、作業能率は悪く、せいぜいその五〇%も上げれば上等の方であつた。一クボの量は約四十センチの直径の松を切り倒して小枝をタポール（斧）で打ち払つて六メートル五十センチに切り落とした程度のものをいふた。後には要領がわかり一〇〇%が遂行されるようになったらノルマを引き上げた。監督はいかにして日本人を働かせるかということに専念してゐた。一〇〇%以上遂行したらハラショーラポータとして配給の黒パンでも量が多くなつた。働かざる者食うべからずの共産国である。

道路班の作業は、森林の中に通路をつくるのである。道路の側溝を掘る。幅六十センチ、深さ六十センチの溝を五メートル掘ることに決められた。ところが酷寒のシベリアの台地は凍結していて、ツルハシもスコップも全然役に立たない。特に吹雪の猛烈に吹きつける日は作業はほとんどゼロである。積載作業班は切り出された材木を六十トン貨車に積み込む作業である。十

人一組で二貨車に積み込めば作業終わりであつたが、これとて寒風吹き荒れる日の作業は並々ならぬものがあつた。

各班とも作業帰りの仕事はまき集めとシラカバの皮取りである。一日の作業を終わつて自分の体をやつと運べるだけの体力しかない。木の根につまづきゴロリと転がりながらやつとの思いで雪道をねぐらへと帰る。暖房用のベチカに枯れ木を拾つて帰らねばならず、また油もない山の中での照明用にとシラカバの皮を持ち帰つて当番が少しづつ裂いて火を燃やして明りとした。

塩のスープに黒パン二百五十グラムの食事で、前述の作業と外気は四十度〜五十度の寒さの中での作業である。どんな頑丈な体でも体力の消耗は激しく栄養失調となり、だんだん体に肉らしいところがなくなり、目玉は大きくなり、骨と皮だけになり、床に骨が当たつて寝返り打つても痛くて仕様がなない。当時一個大隊千人単位で入ソ抑留された者のうち、昭和二十年八月から越冬した翌年の四月までにその三割から五割の人

がシベリアに葬られた。元氣だった隣の戦友が朝冷たくなっている。ほとんど栄養失調の死に方は苦しまず、体力の極限で息が切れる。毎日死者がふえ自分自身もいつこのようになるかしない不安があるが、だんだん無感覚の状態になることは事実である。生きていること自体が不思議だと思う。

極寒中の埋葬は並大抵でない。凍土である上に作業する者自身が体力の限界の来た者ばかりだから、丁寧に穴を掘って埋めて十分土を盛って墓標でもねんごろに立ててやるような常識はない。次から次と埋葬も忙しい。そのために春五月から六月、暖かくなると死体の手や足が現れてくるのである。死者に対しては言語道断の処置で、仏に対して深く謝る次第である。抑留一年目の昭和二十年九月から翌年四月ころまでの生活は食糧の不足に加えて、なれぬ酷寒との闘いで、耐え切れず栄養失調患者の続出で、悲惨な飢餓道をさまよって多数の戦友が酷寒のシベリアの土となった。

昭和二十一年七月には欧州送りとなる。昭和二十三年の八月ダモイのことが通訳を通じ伝達される。また

だまされて別の収容所に送られるのだらうと半信半疑であった。ジャガイモの皮も雑草もヘビもデンデン虫も何でも食べた。日本に帰らねばならないの一念で……。貨車はハリコフを通過した。ウラル山脈を越えノボシビルスクに来たとき、列車が東に向かって走っていることがわかる。欧露ウクライナ地方のドニエプロ、ペトロフスクの街を出発してから二週間以上たったところにバイカル湖に出る。シベリア鉄道を東進してナホトカに着いた。約一か月貨車の旅でついに念願の日本海の港ナホトカに来たのである。

思えば足かけ四年、感慨無量、よくぞ生きたものである。海の向こうには日本がある、祖国がある。帰りを待ちわびる家族が、肉親がある。しかし幾多の戦友をソ連の土と化せしめ、異郷の地で弔う人もないままに永久に残して帰る心境は、あらゆる気持ちが悪く感じ胸に回り、何をか言わんやである。第一大拓丸三千五百トン輸送船の人となる。九月二十日舞鶴上陸。